

ルドルフ・チェレーンとエドゥアルト・シュプランガー (I)

Rudolf Kjellén and Eduard Spranger (I).

山 元 有 一
Yuichi Yamamoto

鹿児島女子短期大学

In der ersten Weltkriegszeit las Eduard Spranger [1882-1963] einige Schriften Rudolf Kjelléns [1864-1922] wie “Die Ideen von 1914”, “Die politischen Probleme des Weltkrieges” und “Der Staat als Lebensform” und hielt seine Untersuchungen für gedankenreiche Arbeit, obwohl es einige dieselben Äußerungen in manchen damaligen Zeitschriften gab, wie Herman Kranold, Siegfried Marck und Ludwig Pohle kritisierten. Warum Spranger Kjellén hochwertigen Urteile fällt? Wo war die Gesinnungsverwandtschaften oder die Denkensrelation zwischen beide? In unübersehbarer Untersuchung- denn man solche Prüfung vermeidet hat- wagen wir diese Fragen zu antworten. Kurz gesagt, ohne die Furcht vor die Vorwurf: *Petitio Principii*, liegt ein Schlüssel “das Deutschland”, das die Gegenbewegung gegen Demokratie und Liberalismus ist und zwar die selten Verwachsung der Wissenschaft und Protestantismus, also der Wahrheit und Werturteil trägt. In Einzelheiten, insbesondere über die zu Kjellén Stellung genommene Sympathie Eduard Sprangers, wird der fortgesetzte Artikel beweisen.

Stichwörter: Kjellén, Staatslehre, Geopolitik, Deutschland.

はじめに

スウェーデンの政治学者で政治家のルドルフ・チェレーン (Rudolf Kjellén/1864-1922) の著作は、1914年以降にドイツにおいて翻訳され広く知られるようになった。我々はその一つを本雑誌第55号で拙訳の形で提示しておいた。彼自身が命名者である「地政学 (Geopolitik)」を国家科学の一領域として定着させた彼の影響は、「戦争の学問」でもあったために第二次世界大戦終結後はタブー視されびたりと絶えてしまったが、少なくともそれ以前ではわが国においても大正期の後半から原爆で終止符を打つ戦争に至るまで、ドイツ語版の重訳という形で出版され、その思想は彼の思考の踏み台であるフリードリヒ・ラッツェル (Friedrich Ratzel/1844-1904) と同一の根を持つカール・ハウスホーファー (Karl Haushofer/1869-1946) によって増幅され、いわゆる「大東亜共栄圏」の論拠ともなった。ところで、チェレーンの著作がドイツで立て続けに紹介された第一次世界大戦中に、彼の地政学が学問上の新興勢力として登場したように、教育学を大学における確固とした地位に据えようと腐心していた事情は、既に我々が本雑誌 (第52-54号) で取り組んできたところである。そして、そうした努力に深く関与した人物の一人がエドゥアルト・シュプランガー (1882-1963) であったことも、もはや議論の余地はない。その際に、彼にとって重要であったのは、

教育学の理論的課題と同時に、教育学の実践的機能と彼が構想した国民教育、そしてそれと連結する政治教育であった。この点で我々は少々ジャーナリスティックに、「ベルリン・バグダッド・ライン」ならぬ「チェレーン・シュプランガー・ライン」とでも呼べそうな思想上の関係を予感する。もちろん、シュプランガーがチェレーンの翻訳が相次いだ当時、ベルリン大学にいなかったこともあって、フリードリヒ・マイネッケやオットー・ヒンツェ、アードルフ・フォン・ハルナックとは違って、この二人の間に事実上の交流があったわけではないが、少なくともシュプランガーの側から見ればチェレーンは親近感を与える存在であったようである。そこで本稿は、シュプランガーがチェレーンの国家科学の何に共鳴し、そこから何を吸収して自らの教育学に用立てたのかを探るために、まずはチェレーンの国家学の概観を手に入れる。ついでその「現実主義的転回」からなされる現実の政治解釈に触れることで、シュプランガーのチェレーン受容を把握するきっかけとしたい。なお、ここでの文章にはチェレーンをはじめ様々な人々の登場を願い出るが、エドゥアルト・シュプランガーはいまだ舞台裏の控え室にいる。また、国家学はこれまでに我々が足を踏み入れることのなかった領域であるために、我々自身の絶えざる確認として多くの引用に自らの身を隠すことを許していただきたい。

I

チェレーンの著作を音楽的な循環形式であると評するとすれば、それはフランクどころか、リムスキー＝コルサコフさえも貶めることになる。どの著作を見ても彼の思想は基本的に金太郎飴のようで、しかも常に挑発的で危険であり、我々の時代とはそぐわない通奏低音が流れている。それだけに彼の著作は、おそらく慎重さを欠く読者を魅惑的幻惑的に鼓舞する効力を現在でさえ有しているだろう。「後の指導者」を思わせる表現は我々も批判的に学ぶところが多い。畳み込むような言葉の端的な短い言い換え、図式化した地図による直観教授の説明、新たに構想された国家学の生物学的アナロジーによる——それ故にかなり具体的なイメージを与える——理論的根拠づけ、そこから得られる望ましい（ドイツにとっての）将来への予言的とも呼ぶべき展望、そして何より勝者となるべき権力（真理）を正当化する手続き——、このように我々が彼を模倣して今ここで表現したような、彼が著作で行っている語り口は、当時の読者にくすぶっていた何かを焚きつけたことであろう。しかも、同じゲルマン民族であると彼が信じるドイツの人々を支えている根本思想や地理的条件性を異国のスウェーデン人として承認し援護射撃するドイツ語版翻訳が第一次世界大戦中に立て続けに出版されたことで、1914年の8月体験で仮象の一体感が生まれていたドイツで広い層に受け入れられたのもあながち不思議でもない。彼のモットーは常に反転可能性を持ったものであった——「私はゲルマンの友であるが、真理はそれ以上の友である（amica Germania sed magis amica veritas）」（Kjellén1916, S.6）。彼の著作はドイツでは、まず『現代の強国』（1914年）、ついで『1914年の諸理念』（1915年）、『世界大戦の政治的諸問題』（1916年）、『生命形式としての国家』（1917年）、『政治危機研究』（1917年）、『歴史学的地政学的研究』（1917年）の戦争中のもののほか、ヴァイマル期にも『政治学体系概論』（1920年）、『三国同盟と三国連合』（1921年）といった具合に1922年の彼の死まで絶え間なく翻訳出版されているばかりでなく、——さらにおそらくこれまでの出版物をパッチワークの形でまとめた『世界大戦前後の大強国』（1930）もある。また、その中のいくつかは結構な版を重ねている——例えば、1914年の翻訳版は1916年で既に第10版を数え、『生命形式としての国家』は1926年に訳者を変更して——ランクフェルトからザントマイアーへ——1929年にも出版されている（1926年で第4版）。特に、1914年8月の国家総動員布告の中で、大都市ベルリンでも数週間で食料品価格が上がり——それに反して賃金は上がらず、その間に市電路線が止まる一方で個人の自動車の半数は軍に徴用され、さらには1915年7月31日には徴用の範囲はさらに広げられて、銅、真鍮、ニッケル製の食器や家

庭用品も加えられるほどの苦しい状況であった。それにもかかわらず、この最初の世界大戦中にチェレーンの多くの著書が読者の手に届けられ読まれていたことは、巷間も含めて彼への注目ぶりを察するに十分である。事実、『学問・芸術・技術のための国際月報』において編集者のマックス・コルネセリウスは、チェレーンの『生命形式としての国家』についての書評で過去に翻訳出版された著作も含めて肯定的な評価を下している——「（私の）この素描はこの書物の豊かな内容を暗示できるにすぎない。いつものようにチェレーンの場合、的を射た多くの図や比較を促す内容が示されている。それらは彼の著作をオリジナルの言語でしっかりと理解しながら手に取りたいという望みを痛切に持たせるものである」（Cornecelius1917, Sp.1152, 補足は引用者）。このような好評価はコルネセリウスに限ったものではなく、マイネッケにしても、ルートヴィヒ・ボーレにしても「芸術家肌の」（マイネッケ）学問人チェレーンの評価は高い。ここでは『ディ・ノイエ・ルントschau』誌におけるマイネッケの文章を引用してみたい——「世界大戦前夜に出版された現代の強国に関する彼の含蓄のある書物は、我々を突き破る事件の思いもしない歴史的序章として、なおも新鮮な記憶にある。彼の1914の諸理念に関する小書は……我々の状況の理念史的理解に従って我々の最良の精神の模索と手探りにとってやはり尋常ならざるほどに特徴的なものである。彼の現在の書物『世界大戦の政治的諸問題』は……強国論が呼び覚ましたあらゆる希望を満たしている。……チェレーンは……力強く直観的にまとめ上げる大量の素材を内的に鼓舞する達人である。……それぞれの事実とそれぞれの数値が彼にとっては直ちに、生き生きと作用しさらに光を照射する力の表現となっており、……読者を驚くべき観点へと進ませ、……誰もが……彼の精神の瞳に広く遠近法的に見る力が備わっていることを理解する」（Meinecke1916, S.723）。後の「理性の共和主義者」マイネッケでさえもが、世界大戦の最中にこうした判断を下していたことは少々驚かされるが、同時にチェレーンの影響力の大きさを我々は知らされることになる。それでは、彼のいかなる思想内容がその時代の人々を魅了したのであろうか。ここでは1926年のフォーゲルの文章に至るまでの書評や論評のいくつかを利用しつつ、主に『1914年の諸理念』、『世界大戦の政治的諸問題』、『生命形式としての国家』を取り上げてこの問いに答えていく。

II

ルドルフ・チェレーンの国家学から地理政策学が地政学としていわば自立する以前、つまり政治学と地理学のアマルガムとして構想されていた背景にまずは目がとめられるべきであろう。1924年にジーガーが『地政学雑誌』におい

て、病に倒れていなければ60歳になっていたはずのチェレンを回顧した文章に、そのあたりの事情が語られている。『現代の強国』のドイツ語訳出版を押し進めたと告白する（vgl.Sieger1924, S.342）ジーガーは、チェレンを「地理学的知識と地理学的な捉え方で自ら豊かにした国家学者」（ebd.,S.339）としているが、その地理学は19世紀末では自然科学の輝かし発展の背後にとどめ置かれていたばかりでなく、その科目が中等教育機関で国土科（Landkunde）に必要な「学校の科目」にすぎず、高等教育機関では一般には関心を引き起こし難い教職試験の科目、しかも「国家科の枠組みの中で」「控え目な避難所を見出す」にすぎない「粗末な現状のまま」の科目であり、この実情をチェレンは「痛々しく感じざるを得なかった」（ebd.,S.340）。これに対して既にチェレンは「歴史を基礎とした健全な政治学が必要であるばかりでなく、地理学をも必要とするという確信」（ebd.,S.341）を持っていた。それは歴史的現在としての国家、政治的現状としての政治、地理的現実としての領土（政治的国土）という、後に『生命形式としての国家』において定式化される五つの研究領域の萌芽である。そのために、彼の国家学は「彼の学問的活動をどこに組み入れるべきかが分からない」と見られていた（ebd.,S.339）。彼の国家学は歴史学、地理学、政治学、法学、統計学など多様な領域を包括する形で構想されており、精神科学的国家学とでも呼べるようなものであった。いずれにせよ、チェレンには大学における地理学の地位向上の願いが根底にあり、そのために国家学の中で地理学に一定の役割を演じさせようとする希望があった。「政治学のすべての部分に空間的観点を導入することが……根本的に彼のライフワークである」とジーガーはまとめている（ebd.,S.344f.）。

他方で、国家学自体にも彼の不満があった。彼が様々な著作の随所で記しているように、当時の国家学では、国家は法の主体であると捉えられ、「国家学は純粋でもっぱら憲法学である」（Kjellén1917, S.1）ことが自明の前提で、「長らく論評されることのない全時代意識によって受け取られた考え方」であった（ebd., S.2）。この捉え方によって、国家の課題は理論的に制限され、合理主義的で演繹的な思考での価値はあるが、内容のない形式的なもの、「かなり抽象的で受け入れるに難しく、専門家でない者にとってはほとんど得るところのないものを約束する学問」（Vogel1926, S.194）となっていた。したがって、彼はその価値観である合理主義にも矛先を向ける。「我々の国家学と我々の国家実践から一掃されねばならない……合理主義……、合理主義は生きることそのものを知らない。それは生活の諸関係が抽象的な諸要因によってのみ、法と理性によってのみ規定されると信じている」（Kjellén1917,

S.225）。こうして彼は国家学の現実主義的転回を目論む——「我々の学問が現実へと緊密に適合すること」（ebd.,S.16）、あるいは「現実のあるがままに（rebus sicutantibus）」（ebd.,S.222）。それ故、チェレンにとって憲法は、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世同様に「紙屑」、可能な限り普遍を目指すとしても、書き換え可能な、あるいは古くなれば廃棄される紙切れと考えられている。「黄ばんだ紙の古い写本を不用意に新鮮な空気に晒すなら粉塵となる」（ebd.,S.201）。国家は「法学的な文字の単なる集合体ではない」（ebd.,S.41）。さらには「我々は……18世紀の啓蒙の哲学が探し求めた『理想的憲法』をやはり信じない」（ebd.,S.200）。チェレンの形式主義批判は、法の問題にまなごしを向け、「社会契約の中に『救済』の言葉を見つけた従来の自然法と最終的に縁を切る」（ebd.,S.205）どころか、啓蒙全般に対しても懐疑的である。例えば、美的な形式にいわば耽溺するフマニテートさえもが批判される——「フマニテートの理想は」啓蒙時代に夢想されていたような「美辞麗句ではない」（Kjellén1915, S.7）。「大きな出来事に対して人間的な（anthropisch）観点はもはや不十分である」（Kjellén1916, S.2f.）。こうした啓蒙批判は『1914年の諸理念』で激烈を極めるが、それがなされるのも、彼が国家学の地位向上とそのための改造を目指していたからだと言えよう。したがって、構想のあり方においては国家学の脱政治化や現実乖離を問題視するヘルマン・ヘラーとも近似している——もちろん、政治的には対蹠であるが。ヘラーは1926年に次のように述べている、本来の専門領域を憲法学に見ている法学的実証主義は、政治的に相対的な合目的性も個人的に様々な価値判断も認めず、すべての決定が論理的法学的なものとして客観的な概念から演繹されるとしているが、20世紀への転換期に「神々の黄昏」がやってきており、「我々はチェレンとも比較可能な国家学の著作をただ一つも持っていない。……我々の国家学の理論的危機と教育的政治的危機は相互に条件づけられている」（Heller1926, S.299f.; vgl.ebd.S.297-300）——ヘラーが述べた「神々の黄昏」という表現はチェレンの『1914年の諸理念』の一章のタイトルであった。少なくともこの時点では国家学を憲法学と同一視することから生じた「実践的不十分さとそれによってもたらされた理論的混乱」（vgl.ebd.,S.299）という考え方では彼はチェレンに同調していたと思われる。

こうした憲法学としての国家学に代わってチェレンが歴史や現実に応じた国家学を望むのには、以上とは異なる意図も働いていた。彼の眼前にあった出来事とは、彼の母国で導入が実現の運びとなっていた普通選挙であった。それは確かに彼にとっても避けることのできない時代の流れであった。けれども、労働者階級が多数派を占める工業化

された社会では、普通選挙は多数決という「この選挙方法がこの階級の手に無制約の権力を与える恐れがある」(Kjellén1917, S.191)と危惧されている。事実、これは特に教養市民層において当時よく示されていた見解であった。そして、同じ箇所では彼はこの階級を、「粗野で能力のない多数派」(ebd.,S.191)と侮蔑的に表現している。したがってチェレンにとって、この多数派に対抗する勢力を形成することが急務となる。それは国民代表ではなく、「釣り合いの錘」としての「社会代表ないしは利益社会代表」(ebd.,S.191,192)であり、彼は教養市民層と共に経済市民層をも天秤の皿にのせている。彼が比例代表選挙に好意的なのは当然であろう(vgl. ebd.,S.191)。他方で、多数派への対抗勢力の形成において重要になるのは、彼にとって政治教育(politische Erziehung)である。これは既に『生命形式としての国家』の早い段階で(vgl. ebd.,S.6)で主張されるばかりでなく、多くの場面で暗示されている。それらを組み合わせてここに示せば、「分解的で破壊的、均一的である」ことが本質であり、「自然法と自由主義」が支配する「公共の市民社会では個々人は連帯的結びつきにはいない」(ebd.,S.178)ために、「個人がその人格の独自性と利害関心にのみに限られ、私的な自己追求とのバランスを保てないところでは、我々が目にするのは脆弱した国民性である。だが、個人の人格の独自の要求が二次的問題であることを求める生き生きとした力として個人が自らの共属性を遂行するところでは、国民性は強力であり」(ebd.,S.112)、「詰まるところ、国家の生命は個人の手にある」(ebd.,S.220)。この個人の心を国家化する。「諸民族や個々人にとって幸福よりも高次にあるもの……を獲得すること、これがより大きく生成する完全性へと人格を改善することである。それ故、民族の素質を完成させることが、国家の目的である」(ebd.,S.232)。したがって、国家学は政治教育に貢献し得る。彼はそのために手段として初等教育機関、新聞、鉄道、兵役義務を挙げ、これらが現実の国民感情を解き放つとしている(ebd.,S.136)。これはジーガーに感じられたチェレンの功績であった——「チェレンは……同時代人の政治教育と地理教育に非常に高い貢献をした」(Sieger1924, S.345)。また、こうした評価は既に第一次世界大戦中の彼の『世界大戦の政治的諸問題』に関するポーレの書評にも示されている。彼はチェレンの書物自体が新しい国家学を教えるばかりでなく、政治教育的作用をも持つとして、大学で講義されることを望んでいる。「差し迫って望まれるのは、チェレンによって提起された方法に従って将来的にドイツの大学で学習する若者を現代の政治的諸問題へと導く講義がなされ、そうして依然としてかなり非政治的な詩人と思索者の民族に何らかのより多くの政治的理解力を引き入れることである」

(Pohle1916b, S.682)。もちろん、この政治的理解力が保守的思考であるのは言うまでもない。また、彼自身が要求していたとは言えないが、彼の国家学がある国家の現実ばかりでなく、他の国家とのその国家の拮抗関係において捉える具体的な比較考察であったことによって、しかもスウェーデン人チェレンによって他国に対するドイツ人のまなざしの変更を求めるものであっただけに、ドイツにおいて地域研究(Auslandsstudium)はいわば彼を通してドイツ国内の大学でも促進するべしという方向に舵が切られた。後においてフォーゲルがチェレンに国家学における法学的研究に引退を迫ったことに対する名誉勲章を与えた後に、「現実的な意味における『地域研究』の育成を求めて努力していたプロイセン文化事業省において最近ではそうした見解から再び距離を取っているように思われる」(Vogel1926, S.241)として当時の事情を批判しているように、彼はチェレンが第一次世界大戦中にドイツにおける地域研究の必要性の議論に火をつけたことを評価している。実際のところ、大学における地域研究の開設については、その時期にプロイセン議会における審議事項ともなっていたし——これについては別な場所を設ける必要がある——、既に大学人の間でも話題になっていた。何より植民地研究所等々の施設からのハンブルク大学の昇格は、チェレンの著作がドイツで目を通されていなければあり得なかったとも言えるだろう。

したがって、こうした現実的具体的学問へと向けて旋回するチェレンの国家学は、経験的で記述的、比較的で分析的な国家学となる(vgl. ebd.,S.204ff.)。また、マルクは——我々も後に触れる——超個人的な人格としての国家の生・生命(das Leben)の直接的で生き生きとした行為をその「国家科学は、歴史においても既に役割を演じている『理解』で圧倒的に研究する」(Marck1919, S.78)ために「経験的直観以上の高い程度の直観性」(ebd.,S.89)を必要とする点で、「ある種現象学的な手続きを確認できる。それ故に、国家という事象そのものは経験的な国家に応用された『本質直観』に姿を現す対象として考察可能であろう」(ebd.,S.90)としている。既にこうした指摘の中に、チェレンの思考方法にデイルタイやフッサールとの類縁性があると当時見られていたのは明白である。さらに、チェレンが全体としての国家を単なる部分の加算の結果とは考えていないという点でもそうである。彼が「国家は変化する憲法図式や法主体としては考えられず、むしろ大きな生命体として、善悪において生命衝動によって満たされている超個人的な人格として考えられる」(Kjellén1916, S.4)と述べるとき、この「超個人的」性格は個人の総和を越えたものである。この「全体とはその部分の総和とはいくらか異なるものである」(Kjellén1917, S.228)という考え方

は、フォーゲルの指摘を待つまでもなく（vgl.Vogel1926, S.22ff.）、ディルタイやゲシュタルト理論とも関連している。チェレンは国家学におけるこの命題の実例として、ドイツ・ライヒを挙げている（vgl.Kjellén1917, S.228f.）。つまり、ドイツ・ライヒは個別国家の加算の結果ではなく、それ故に個別国家の幸福とは異なる目的を有していると思われる。

そして、彼はこの命題を一層拡大して解釈する。その際に、経験的国家学の観点に——既に触れているが、随所で導入を求めている——生物学的有機的観点が加わる。彼は国家を、生命を有する、したがって誕生し、成長を遂げ——場合によれば成長を妨げられたり若くして没したりする——、やがて老衰し死滅することもあり得る有機的な存在と捉えている。したがって、国家は個人とは全く異なる種類の人格（国家人格 [Staatspersönlichkeit]）を完成させようと努力するが、奇妙なことに個人と全く同じように成長、つまり領土上の拡大、しかも連続性を持った拡大を求めると同時に、自己保存を求めて自己主張する（vgl.ebd.,S.117f.）。言い換えれば、分立主義（Partikularismus）は先祖返りであり——というのも、それはかつての小さな身体（小国）に戻るからだからである——、克服されねばならない。これを彼は人口問題で証拠立てる。人口過多——生物で言えば、細胞の増殖——の場合には「過剰な民族体集団は『荒地のパン（Manna）』を求める」（ebd.,S.153）。この実例として、現在完了形のイギリス、現在進行形のドイツや日本、イタリアが挙げられている（vgl.ebd.,S.154）。そして、ここに国家の領土や経済等における膨張政策、つまり国家の身体的精神的成長が容認される。この場合にチェレンにとって領土（Reich）が最も重要になる。というのも、領土は彼にとって国家の身体そのものだからである——「国家の身体もアキレス腱や心臓を持っている。そうした命に関わる部分は何よりも首都であり、交通の大動脈である」（ebd.,S.61）。我々がこうした彼の議論に、当時の国家の現実に積極的に肯定する保守性を見ることは容易であろう。彼は明らかに民主主義国家や自由主義国家ではなく立憲君主国家における帝国主義に与している。彼にとって帝国主義は「強国の略奪政策」（ebd.,S.153）、外部へと向けられた支配衝動であり、これを引き金とするドイツとオーストリア・ハンガリーを基礎にした中央ヨーロッパ構想、さらにはレヴァント・プログラムを彼は擁護する。彼が国家学の研究対象として、帝国主義において成功を収めたケースを、つまり強国を、それぞれの歴史的現在としての国家の現実存在の内的外的諸条件に結びつけつつ研究したり、そうした研究のまなざしを「惑星的（planetarisch）」と表現して、諸強国を複数の惑星と見立てて——小国はさしずめ衝突を繰り返すバル

カン化した小惑星となる——、それらの大きさと配置、それらの運動と相互の引力関係で相互の作用を予測しようとしたりするのともこれと関係がある。例えば、太陽から隔たるに従って惑星は巨大化するが、なぜ火星は地球よりも小さいのかと問うように、なぜドイツ（あるいは日本）は……？といった具合にである。こうした見解の結果として戦争もまた許容されると同時に、彼の国家学は平時及び有事における帝国主義国家という船の舵取りの学問となる（vgl.Kjellén1917, S.39）。「領土の有機的本性が戦争において以上に際立つことはない。戦争はあらゆる政策と同様に、地理政策学（Geopolitik）の実験場である。……参謀本部は敵の領土が政治的組織においてどれほどの価値があるかを考慮して、出兵計画を立てねばならない。……敵の意志をへし折ることが近代戦争の目的であり、そのための最もラディカルな手段が、敵からその全領土を奪い取ることである。というのも、それは自ら固有の身体を自由に用いる権利を奪うことだからである」（ebd.,S.62f.）と述べて、先に国家学が平時における政治教育の学校として捉えられていたが、彼はここでは地政学を有事における参謀本部に見立てている。戦争はチェレンにとって国家をあるがままに見せる格好の材料であった（vgl.Kjellén1916, S.3）——世界大戦の政治的諸問題に関する著作は、強国同士の間の均衡関係（同時に緊張関係）の解明においてその典型である（bes.ebd.,S.22ff.）。このようにチェレンの国家学では「全体と部分」の関係は加算的でなく乗法的——その関係が負に作用するときは減算的でなく除法的——であり、そうした見方は様々に適用されている。全体としての国家は個々人の総和ではなく、ゲシュタルトとしての国家は要素の集合ではなく、有機体としての国家は原子論的細胞の集合体ではなく、人格としての国家は分散的な利害関心の社会的諸集団の総和ではなく、したがって国家は量的（数的）存在ではなく、むしろ質的存在、超越論的存在と考えられている。これによって全体としての国家は個々人や社会集団といった部分に常に優先することになる。「国土のうちにいるすべての個人は、外国人であれ国民であれ、国家の主権（Oberhoheit）に支配される」（Kjellén1917, S.58）。

既に見てきたように、地政学（地理政策学）が有事において特別に重視され、またジーガーが文章を載せた『地政学雑誌』がそうであるように、チェレンの国家学からは地政学だけが独立していき、本来連関するはずのその他は独自の学問領域を形成しなかったが、直前の引用に「あらゆる政策」とあったように、チェレンは決して地政学にばかりに重心を置いていたわけではなかった。少なくとも彼はそれを国家学の活動領域である政策学の一部門のものとして考えていた。したがって以下では地政学という言い

回しではなく、敢えて地理政策学としてこれを扱う。

国家学を憲法学に限定しないことによって、この二つの関係は逆転し、国家は全体的なあり方の独自の権力を絶えず強化しようとする有機的存在として、法としての国家を反対に包括することになる。その強化のために国家は領土政策や人民政策、社会福祉をも含む社会政策、経済政策、外交政策など、あらゆる政策を行使する。これによって国家学は著しく広範な研究領域を獲得する。チェレンは国家学の研究部門を5部門に区分する。その際に中心的課題となるのは、国家意志がどのように形作られ、その意志を伴った国家権力がどこへ向かい、どのような姿をとるのかということである。彼の国家学にとって出発点となるのは、——後に地政学として独立する地理政策学ではなく——人民政策学 (Ethnopolitik/ Demopolitik) である。というのも、「民俗のエLEMENTは国家においては領土のモメントに先行する」(ebd.,S.49) からである。人民政策学から一方ではまず社会政策学 (Soziopolitik) を経て、管理政策学 (Herrschaftspolitik/ Kratopolitik) ——そのほかにも Regimepolitik や Verfassungspolitik, Verwaltungspolitik など、様々に言い換えられている——へと至る政策学が関連してくる。他方で、人民政策学から経済政策学 (Wirtschaftspolitik/ Ecopolitik) を経て、地理政策学 (Geopolitik) へと至る。

ところが、彼はこの5部門を人間の指に喩えており (vgl.ebd.,S.42)、その指一本一本に目標に達するための尺度を与えている。民族のタイプ (Volksschlag) を人種類型と言語共同体から認識しようとする人民政策学は、国民的傾向 (内因性) と地理的条件 (外因性) を、つまり文化の側面と自然の側面を前提とする国民性 (Nationalität) を尺度としている。ただし、ここでは文化の側面から見れば、国民性は国民を一つにまとめるもの、「我々がこの国の国民である」と自覚させるものである。チェレンはこの尺度で血の類縁性や言語の共同性を余り重視していない (ebd.,S.106,109) ——例えば、フィンランド民族のブルガリア人がドナウ川へと移住した後にスラヴ語に自らの言語を変えたことを挙げている (vgl.ebd.,S.108)。むしろ国民性は個人の利己主義との均衡を保つものと考えられている (vgl. ebd.,S.112)。具体的には歴史である。「個々人ではなく、国民が歴史の真の英雄である」(ebd.,S.127)。したがって、国民性とは歴史によって獲得される自己同一性と言えるであろう——ここに公教育における歴史教育が重要となる (vgl.ebd.,S.136)。ついで、民族はその共同のあり方から社会を形成するため、社会が国家に及ぼす影響を解明する社会政策学は社会性 (Sozialität) を尺度として国家を視野に収めようとする。この尺度は、市民社会が根源的に持つ利害追求の衝動を克服し、各社会集団の利害関係に調

和的な均衡を作り出そうとする調和の感情であり、それは国民性や次に示す忠誠とアナロジーを考えられている (vgl.ebd.,S.181)。さらに国家の確固とした成立の後には、逆に国家が社会に対して作用するために、国家における支配と統治の機能を考察し、国家が法的にどのように組織されているかを明らかにする管理政策学は忠誠 (Loyalität) を尺度とする。忠誠は「国家のすべての市民を同一の責任感情で一つにまとめる」「連帯性」(ebd.,S.101) であり、全体に対する犠牲の精神である。この一連の流れは民族が社会を形成して、国家となる歴史的経過に対応していると同時に、「国民性から社会性を経て忠誠へ」という国家が民族に期待し、国家自体も求める「民族の心 (Volksseele)」の変遷にも対応している。——「国民が精神を求めて努力するだけではない。国家も心を求める」(vgl.ebd.,S.137)。したがって政治教育の重要性が再び示されていることになる。国民性の議論において「国民は自らの国民性を忠誠へと理想化しようとする」(ebd.,S.137)。これを促すのが政治教育である。

他方で、人民政策学においては自然の側面も無視することができない。したがって、ここからもう一つの流れが生ずる。人民政策学においてまずもって国家権力を左右する問題は、人口問題である (vgl.ebd.,S.152)。これについては既に触れたのでこれ以上は入り込まないが、この問題は国民の生計を考慮する国家にとっては、経済政策的問題として現れる。ここで人民政策学は経済政策学に移行する。経済政策学は国家を経済的能力、つまり家政 (Haushalt) に従って解明する。例えば、人口問題は生活の向上と維持において貿易問題に直結している。食料品の輸入は国民の生活を支え (あるいは農業の衰退を招き)、原材料の輸入は国内の工業化を推進し、文化の輸入さえも国民教育に望ましい (あるいは望ましからぬ) 影響を与える。しかし、それがコスモポリタンの自由貿易 (門戸開放) であれば、国家間の競合が生じ、これに対して保護関税制度や封鎖利益圏が導入されれば、国家間の交流は鈍化するどころか、弱者は疲弊する (vgl.ebd.,S.162f)。これに対しては経済ブロックの形成で対抗するであろう——先に見た中央ヨーロッパ構想がそうである。このように経済政策学は国内経済を国際関係の中で理解する。その際、その尺度はアウトルキー (自給自足) である。誤解されてはならないが、アウトルキーは閉じた空間で自己完結・自己充足していることではない。チェレンはアウトルキーを、「超高度文化の類型と植民地類型との均衡」(ebd.,S.162) の尺度とする。したがって、次の地理政治学と同様に「調和」、つまり「多様性における統一」(ebd.,S.39) が理想的である。反対に、単一性では国家は不健全である。例えば彼が指摘しているわけではないが、アイルランドの馬鈴薯の単作農業は重大

な不作と北米への人口流出をもたらした。経済の交流は不可欠であるが、その調整も不可欠である。これが崩れるときには最終的に戦争が発生する。しかし、戦争は同時に領土の問題である。それ故、国民経済は領土を基礎として成立するのであるから、領土に基づく生活のあり様とあり方が模索されねばならない。確かに、ハンザ同盟のように「国土なしにも社会的存在はある」が、「そうした存在は国家ではない」（ebd.,S.47,48）。したがって、土地（Land）は国家にとって必要条件である。だが、土地は十分条件ではない。それは固定したものではないからである。有機的生物学の観点で見れば、土地は拡大したり縮小したりするものと見做される。身体の一部が失われることもあるように、身体としての領土も新たに獲得されたり失われたりする。それ故、国土はそもそも土地（Land）ではなく、領土（Reich）である——フリースラントやユトラントのように「ラントは地域にも用いられるが、ライヒという言葉は完全な国家にのみ許されている」（ebd.,S.47）。つまり、領土は「政治的組織によって浸透された土地」（ebd.,S.43）であり、この領土との関係で国家を考察するのが地理政策学である。その課題は何より大地の形態や内容、気候など自然の性質を踏まえた住民の配置や配分、人口の濃淡（地理的分布）、ついで食糧（農業）や資源（工業）の問題、交通の問題、そして国境問題（国家間の関係）などであり、地理政策学はこうした対象の考察から、外交的には国際関係や戦争の原因を地理学的解明する。その際の尺度は、自然領域の調和である。領土は飛び地であるよりは、連続していることが健全であり、領土の連続性を目指して領土の拡張は行われる——チェレーンはこれを「連結問題」（ebd.,S.77）と呼んでいるが、ただし彼は陸地と海洋を想定しており、航路は念頭に置かれていない。この「自然領域の調和」では、「構成している自然の諸類型（耕地、草原、森林、山地、水路）によって正しい関係で調和的に占められていること」が望ましく、「同種であることは一つの弱点である」（ebd.,S.76）。とはいえ、「自然はほどよい境目〔国境〕で豊かな貯えを持っているわけではない」（ebd.,S.77）から、「領土問題の解決として」「必要なのは自然の国境の外的優位と自然領域の内的優位であり」（ebd.,S.75）、これによって侵略戦争は彼によってはっきりと正当化され必然となる。先に法に対する国家の優位について触れたが、ここでは国際法に対する国家の優位が語られる。「国家は……国際法を傷つけざるを得ない罪を負っている。正確に境界づけられ極めて入念に考量された領土関係を持つ既存のシステムは突き破られざるを得ない」（ebd.,S.207）。そして、地理政策学や経済政策学にとっての国境は自然の側面であるばかりでなく、「国民意識と結びつき、いわば精神的境目をなしている」ために、外交的

に領土における国家の生命のあり様とあり方の解明と模索を行う自然の側面としての地理政策学は、忠誠の念による国民統一、統治体制の完成を解明する文化の側面としての管理政策学につながり、こうしてチェレーンの提起する5つの部門はその円環を閉じることになる。チェレーンの国家学は、ちょうど生物の「健全」への自己保存衝動を持つように、国家の健全な成長、つまり国家の調和的發展を求めて努力する。

III

以上のような国家学理論に支えられてドイツ性（Deutschheit）の歴史的現実の正当化を図っているのが1914年の諸理念に関するパンフレットである。それは啓蒙思想に由来する世界主義、個人主義、物質主義の現実の暗黒面を提示し、その根本にある自由（liberté）、平等（égalité）、博愛（fraternité）を断罪することによって、この1789年の理念に1914年の「ドイツの組織の理念」（Kjellén1915, S.6）を取って代えようとするものであった。既に触れたように、チェレーンの新しい国家学にとって、それが克服すべき法学的演繹的で、それ故に抽象的で現実感覚のない国家学は啓蒙思想と1789年の理念に由来していた。それ故、アンシャン・レジーム（テーゼ）のアンチテーゼであったフランス革命の理念の止揚が、つまり1914年の理念におけるジンテーゼが彼の国家学から導かれるものであった。世界主義（Kosmopolitismus）は偉大な根本理想であったが、赤色インターナショナルによっていわば「逆立ちした世界主義」——チェレーンは「間違った世界主義」（ebd.,S.18）と呼んでいる——へと衰弱してしまった。彼のこうした見解の背景には、平等は自由と同様に元来「通過点」（ebd.,S.37）にすぎないものだったが、時を経て「手段と通路から目標そのものになってしまった」（ebd.,S.31）という認識がある。目標そのものとなった平等は彼にとって平均化と同義であり、「粗野で能力のない多数派」にとっては福音となるが、才能のある者にとっては抑圧となる。その結果として「様々な部分が全体に対するその意義において」有する「価値」も失われる。彼が期待するのは平均化された社会でなく、「正当性と現実の価値に従って配分される社会」（ebd.,S.37）である。したがって、この社会においては自己保存の衝動が支配的であり、才能ある者の上昇が課題となるため、基本的に配分論が適用されるが、同時に競争は激化するだろう。各国のナショナリズムに基づく世界大戦は平等の世界主義への反動であったとチェレーンは見ている（vgl.ebd.,S.11）。こうして彼は「世界主義は死んだ。国際主義（Internationalismus）が生きている」（Kjellén1915, S.13）と語ることができた。ここで注意しなければならないのは、国際主義が国際協調

主義という意味で用いられていないことである。それは文字通り「相互ナショナリズム」、つまり相互にナショナリズムを主張し合い競合する状態という帝国主義を承認する立場から用いられている。ところで、配分された社会において競争が激化し、個人主義的な欲望がもたらす無政府状態が生まれれば、チェレーンの考える「ドイツの組織の理念」が実現されているとは言い難い。「粗野で能力のない多数派」が自由を行使するところでは、平均化によって「より低級な文化理想やより低級な生活理想」(ebd.,S.16)から「高められた外面的美化、高められた快適さ、感覚の快楽」(ebd.,S.15)ばかりが追求され、「常軌を逸した個人主義」は「物質主義」を招く(ebd.,S.18)。時代は「我々を直接に奈落の底へと導くに違いない無限定で一方的な自由崇拜に苦しんでいる」(ebd.,S.32)。それ故、自由も制限されねばならない。彼は自由に責任、共属性、権威を対置する(vgl.ebd.,S.33)——別の箇所を示されている義務や犠牲、忠誠もこれと等置されてよいだろう(vgl.ebd.,S.13,23)。そしてそれらをチェレーンは「秩序(Ordnung)」で包括している(vgl.ebd.,S.33)。そして、秩序の要求をすべての国民に知らしめたのが歴史的必然性としての世界大戦であったと彼は考える。「解消する小さな諸要素で散り散りになりぎりぎりのところに来ていた世界は、改善され悔い改められるために塹壕へと送られた」(ebd.,S.33f)。とはいえ、チェレーンは自由を廃棄するわけではない。むしろ、自由は秩序と並んで真理を形成するものとされている(vgl.ebd.,S.33)。我々はここでプロテスタンティズムの「外的服従と内的自由」を思い起こす。この小書の別の箇所からの引用はこのことを証拠立てている。「戦争は内側から外側へと憎悪を育て、それ故にそれぞれの国を純化し、純化された土台の上に自己犠牲と自己否定の種子を蒔く。……こうして……大きな連関に対する恭順が真にキリスト教的な博愛精神を生み出す」(ebd.,S.22)。ところで、チェレーンは平等や自由にかなり批判的ではあったが、フランス革命の3本目のロウソクである博愛に触れる必要性をさほど感じておらず、ただ次のように述べるだけである。「国民的な共属性の外部に世界主義的理想が示されている限りで、我々の修道会社会のこの博愛に対する(gegenüber)現代の理想として、父の家の子であることだけを立てておこう」(ebd.,S.38・強調は引用者)。一見したところ、博愛をキリスト教的な彩りで伝えているようだが、二重の意味において徹底した変更が加えられていることを察知することができる。何より注意したいのは、「～に対する」という表現においてカトリック的な博愛に彼が対抗していることである。先に世界主義がかなり痛烈に批判されているのを見たが、カトリックは一つの国にとどまらない信仰共同体であるという点で世界

主義的であり、その点で彼はその世界主義——あるいはそこから導き出される平和主義——に対してまさにプロテストしなければならなかった。その点でドイツ語における博愛が——fraternitéでなく——Brüderschaft(親友の関係)であることは、ここでは興味深い事実である。つまり、それは外部へ向けての平和主義的な愛ではなく、むしろ内向きのものである。『生命形式としての国家』において、民主主義的で自由主義的な市民社会を批判して、それに変わる新しい社会形式として独特の「社会主義」、つまり保守的な社会主義を提案していたが、そこではそれは「仲間(Kamerad)との結びつき」(Kjellén1917, S.179)と関連づけられていた。これはチェレーンが意味変更した博愛とはほぼ同じである。したがって、彼は博愛の意味合いを大きく変えている。また、カトリック的博愛に代えて提案されている「父の家の子であること」も「親友の関係」や「仲間」と関係しているだろう。この言葉が内側へ向けられているとすれば、「父の家」とは国家ないしは母国ならぬ「父国」を指すと見ることもできる。したがって、「父の家の秩序に服従し自ら義務を果たす自由を持つ国家の子どもとしての国民であり続けること」と意識できるであろう。いずれにせよ、ここには博愛のプロテスタント的解釈があり、この捉え直しは極めてドイツ人向けの訴え方であって、『1914年の諸理念』の終わり部分で指摘される「キリスト教の教義が回心と特徴づける精神的激変」(Kjellén1915, S.45)とも関連している。とはいえ、この回心は単に博愛の転換にとどまるものではない。言うまでもなく、それは1789年の理念から「義務と秩序、正当性」によって組織化された国家をもたらす1914年の理念への回心である。先にその理念がアンシャン・レジームと1789年のジジューゼと考えられていると述べたが、世界の破局の演劇が開演したときの高揚した国民の統一感情が作り出した「物語」(Narrativ)である1914年の理念は、自由(西側)と抑圧(ロシア)、つまりドイツが中央に位置して闘いを挑んでいる現実を冷静さを失って肯定するものでもあった。ここにおいて、「私はゲルマンの友であるが、真理はそれ以上の友である」というチェレーンのモットーは、この小書において反転している——「私は真理の友であるが、ゲルマンはそれ以上の友である」。『1914年の諸理念』出版(1915年12月15日)の2ヵ月後には「我々はその著作を最も価値のあるものに数え入れる。……民族戦争において相互に争っている政治的諸理念を熟考することへとチェレーンが呼びかけたことは……精神を駆り立てている」(Pohle1916a, S.13f)と一定の評価をしていたボーレであったが、その後の所見では見解を改めており、これはかなりの的を射ている——「戦争が勃発した後に、対立関係の炎に新たな燃料を供給し、民族間の憎悪を絶えず高く燃え上がらせるのに

利用されたのであろう」(Pohle1916b, S.681f.)。事実、チェレーンのこの小書はそもそもが戦時中の講演ということもあって、そうした扇動的な側面を元来有していた。とはいえ、『生命形式としての国家』が通俗講義として既にこの小書に先立つこと7年前の1908年に行われたものであったから、『1914年の諸理念』は1917年の著作を明らかに下敷きをしていると考えるのが妥当であろう。1915年の小書は『生命形式としての国家』において示された5部門の政策学を前提として、将来のドイツの（不幸な）姿を正確に予見している。『生命形式としての国家』における人民政策学から経済政策学を経て地理政策学へと至る流れは、『1914年の諸理念』における身分社会を根底とする絶対主義のテーゼにアンチテーゼを突きつけた、経済政策学の対象ともなり得る自由主義（商業主義も含む）や民主主義を経て、その矛盾の解消の表現としての帝国主義というジンテーゼ——地理政策学の主要な研究対象——へと至る流れと一致しており、それぞれの政策学が尺度として提示するものも、チェレーンによって示されるものとも対応している。つまり、外的服従を求める国民性から内的自足（内的自由）を求めるアウトルキーを経て総合としての調和への移行でもある。それは具体的には、ロシアからイギリス・フランスを経てドイツへと流れる歴史的必然性として捉えられる。他方、抑圧の絶対主義の要求する従わざるを得ない義務の人民政策に対する反動として自由を奉じて「万人の万人に対する闘い（bellum omnium contra omnes）」を生んだ階級社会は、秩序によってバランスを取らねばならなかった。これを行うのが社会政策学であったが、それは身分社会というテーゼと階級社会あるいは市民社会のアンチテーゼを止揚する新しい社会主義——多数派の単に労働者階級の自由と平等を保障する社会主義とは別の意味での「上からの社会主義」——によって更新されねばならなかった。事実チェレーンは、プロレタリアたちの社会主義を「原則的に国家敵対的ではない」（Kjellén1917, S.183）としている。この克服が管理政策学の課題であった。それは人民、社会、管理の各政策学が作るもう一つの流れであり、仮にこれらの政策学が円環を閉じるとするなら、それは五度圏における五度進行と四度進行とも比較可能であろう。事実、ト長調と近親調がハ長調とニ長調であるように、人民政策学の隣に位置づけられている経済政策学と社会政策学は類似した機能を対応させている。経済政策学における自由主義の規制と社会政策学における自由の制限の対応関係がそれである。政策上の見かけの相違は、人民政策から経済政策を通り抜けて地理政策に達する経路が外交的政治的であるのに対して人民政策から社会政策を経て管理政策へ至る経路が内政的教育的であるところにある。とはいえ、後者においても前者の裏側——五度進行に対する四度

進行——の関係を表しているにすぎない。それではこの円環はどこで調和的なバランス——チェレーンの国家学の最終目的である円錐の頂点——を獲得するのであろうか。調性音楽が五度圏に則ってあちこち彷徨し、主調である「父の家」に帰郷するように、彼の国家学は父である祖国を求める。ここで新聞記事からの引用という彼お得意の手法を真似てみたい。『ドイツ鉱山新聞』は1933年11月3日に『スウェーデン日々新聞』の記事を要約して次のように伝えている。「国家社会主義の父はスウェーデン人である。……単に国家社会主義の理念ばかりでなく、『国家社会主義』の名称すら、この人物が特徴づけた」（DBZ1933）。彼の国家学は無理矢理に逆立ちして転倒する社会主義のためのシナリオを提供することになったと言えるだろう。

次節のために

人物研究を行う際、駆け出しの若い研究者にとって、次の言葉は堅く守るように思われていた。すなわち、「まずはその人物に惚れ込むように。〇〇馬鹿と呼ばれるくらいに没頭しなさい」というものである。わが国における人物研究は、現在でもそうした傾向を引き継いでいるだろう。それだけに研究対象となる人物のある側面は等閑視され、その他の部分で偶像崇拜化される傾きがある。そして、歴史的現実から切り取られた部分が一般化され、思想として主張される。我々が長年付き合っているエドゥアルト・シュプランガーは、教育学においてはそうした典型的な存在であろう。過去のわが国の二次文献に目を通してみても、こうした傾向は1980年代後半のマイアー＝ヴィルナー（Meyer-Willner1986）あたりから始まるドイツでの批判的な試みとは異なる、従来からの批判なき受容が続いている。とはいえ、少なくとも既に歴史的に学問的处理がなされているとも言えるルドルフ・チェレーンの場合には醒めた距離感で関わるができるが、初期の学位論文の末尾のビスマルクからの引用から最晩年の草稿「プロイセン的なもの」にまで及ぶシュプランガーの保守性を彼と関連づけるとなると、かなりの逆風もあり得るだろう。次節以降においてはこれに取り組むことになる。さしあたり、ここで筆を置くこととする。

引用及び参考文献一覧

本稿は下記の文献を利用しているが、引用にあたっては以下のような略号をもってする。

- Cornicelius1917 : Cornicelius, Max[Rez.]: Rudolf Kjelléns neueste Buch. In: Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik. Bd.11, 1917, Sp.1149-1152.
- DBZ1933: Deutsche Bergwerks-Zeitung. Nr.257, 01.Nov.1933, Düsseldorf.
- Frischeisen-Koehler1919: Frischeisen-Koehler, Max[Rez.]: Kjellén, Rudolf: Der Staat als Lebensform. In: Historische Zeitschrift. Bd.119, 1919, S.85-86.
- Heller1926: Heller, Hermann: Die Krisis der Staatslehre. In: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd.55, 1926, S.289-316.
- Heller1934: Heller, Hermann: Staatslehre. Hrsg. von Gerhart Niemeyer, Leiden: A.W. Sijhoff, 1934.
- Kjellén1915: Kjellén, Rudolf: Die Ideen von 1914. Übersetzt von Karl Koch, Leipzig: S. Hirzel, 1915.
- Kjellén1916: Kjellén, Rudolf: Die politischen Probleme des Weltkrieges. Übersetzt von Friedrich Stieve, Leipzig/ Berlin: B.G. Teubner, 1916.
- Kjellén1917: Kjellén, Rudolf: Der Staat als Lebensform. Übersetzt von Margarethe Langfeldt, Leipzig: S.Hirzel, 1917.
- Kranold1916: Kranold, Herman[Rez.]: Kjellén Rudolf: Die politische Probleme des Weltkrieges. In: Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd.44, 1916, S.303-305.
- Marck1919: Marck, Siegfried[Besprechung]: Rudolf Kjelléns Theorie des Staates. In: Kant-Studien. Bd.23, 1919, S.77-100.
- Meinecke1914: Meinecke, Friedrich[Rez.]: Rudolf Kjellén: Die Großmächte der Gegenwart. In: Historische Zeitschrift. Bd.114, 1914, S.152-153.
- Meinecke1916: Meinecke, Friedrich[Besprechung]: Probleme des Weltkrieges. In: Die neue Rundschau. Jg.27, 1916, S.721-733.
- Meinecke1969: Meinecke, Friedrich: Straßburg- Freiburg- Berlin 1910-1919. In: Kessel, Eberhard[hrsg.]: Friedrich Meinecke Autographische Schriften. Stuttgart: K.F. Koehler, 1969, S.137-320.
- Meyer-Willner1986: Meyer-Willner, Gerhardt: Eduard Spranger und die Lehrerbildung. Die notwendige Revision eines Mythos. Bad Heilbrunn OBB.: Julius Klinkhardt, 1986.
- Pohle1916a: Pohle, Ludwig[Rez.]: Rudolf Kjellén: Die Ideen von 1914. In: Zeitschrift für Sozialwissenschaft. Jg.7, Hf.2, 1916, S.136-138.
- Pohle1916b: Pohle, Ludwig[Rez.]: Rudolf Kjellén: Die politischen Probleme des Weltkrieges. In: Zeitschrift für Sozialwissenschaft. Jg.7, 1916, S.676-682.
- Schwabe1961: Schwabe, Klaus: Zur politischen Haltung der deutschen Professoren im ersten Weltkrieg. In: Historische Zeitschrift. Bd.193, 1961, S.601-634.
- Sieger1924: Sieger, Robert: Rudolf Kjellén: Zeitschrift für Geopolitik. Jg.1, Hf.6, 1924, S.339-346.
- Verhey2000: Verhey, Jeffrey: Der "Geist von 1914" und die Erfindung der Volksgemeinschaft. Hamburg: Hamburger Edition, 2000.
- Vogel1926: Vogel, Walther[Besprechung]: Rudolf Kjellén und seine Bedeutung für deutschen Staatslehre. In: Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Bd.81, Hf. 2, 1926, S.193-241.

(2018年12月11日 受理)